内容・理解志向の教授法への応用に向けた英語文体論的考察
—Barack Obama 氏による広島スピーチ（2016）を題材に—

髙橋　玄一郎

はじめに

本稿は、内容志向や理解志向の英語教授法、たとえば、Content-based Approach や Text-based Approach への応用に思いを巡らしながら、Barack Obama 米大統領による広島スピーチ（2016）を題材として、テキスト全体の言語構造の解釈を通じて、言葉に宿る力をよりよく考察することを目指す[1]。言葉に宿る力を考察するには、教育、学習の現場でも、何かの機会に、細切れの英文ではなく、一つの言語表現全体を見渡しながら洞察する環境の提供が必要であろう。

主として文体論的な面から、テキストの構造、語彙・文法・文体特徴に目を向けて、テキスト全体の能動的、総合的な理解に向けて考察を進める。また、社会文化的文脈との関連付けの面から、同氏ならびにその他、同時代の国際社会に関わる人物によるスピーチの一部にも言及する。

今回の主要な考察対象となる広島スピーチは、2016 年 5 月 27 日、時のアメリカ合衆国大統領、Barack Obama 氏によって、広島県広島市の広島平和記念公園にて語られたものである。

1945 年、太平洋戦争終結の年に日本国が広島、長崎において原子爆弾（以下、原爆と略す）を経験した後、71 年を経て初めて、米国大統領が原爆による戦没者慰霊のため広島を訪れた（2016 年 5 月 27 日）。本来、演説は特定の時と場所を備えた一回性を有し、一回限りのメッセージと考えられるが、本稿は便宜上、公開された、書き言葉としての言語表現を頼りに、主に注釈的な記述方法を用いる。関連して取り上げるその他のスピーチも同様に扱う。

まず Obama 氏による広島スピーチ（2016）全体の趣旨を捉えておこう。広島・長崎の原爆による教訓として、核融合・核分裂をも可能にした科学の革命というものは、人間の「モラル」の革命も必要とする。このモラルをかみしめるため人は広島を訪れる。種々の絶望的な困難が山積する中であっても、人間の想像力、感覚、声なき叫びへの傾聴から、各国内外の政治に関わる為政者を含めた全人類がモラルに係る想像力を覚醒・発揮させ、子孫らへ命を育むストーリーを語り継ぐことで、希望のある新たな未来を切望するというものである。

そのような、人類の平和構築へのメッセージの要諦が、文体上の表現手法、たとえば、擬人法的表現（無生物主語構文）、時制表現、譲歩・逆接表現によって効果的に支えられていることをみる。

なお、社会文化的文脈との関連づけの一助として、Obama 氏のノーベル平和賞受賞スピーチ（2009）、非政府組織 International Campaign to Abolish Nuclear Weapons（ICAN）によるノーベル平和賞受賞スピ

[1] 言語教授法は多岐に亘り、言語教育・学習の現場では、複数のアプローチが使われていることが多い。教授法の概観には、例えば、石川（2017: 167-242）を参照されたい。

ーチ（2017）ならびに Kazuo Ishiguro 氏によるノーベル文学賞受賞スピーチ（2017）にみられる、オバマ氏による広島スピーチ（2016）との関連性にも言及する。

１．Barack Obama 氏による広島スピーチ（2016）に見られる構成と展開

スピーチ冒頭の一節は、広島上空から原爆が落ちる瞬間を描写し、原爆は、広島の破壊をもたらしただけでなく、人類が自らを破壊し、自滅する手段ともなったと指摘する：

(1) Seventy-one years ago, on a bright, cloudless morning, death fell from the sky and the world was changed. A flash of light and a wall of fire destroyed a city and demonstrated that mankind possessed the means to destroy itself. （下線は引用者による；以下、同様）

下線部はいずれも、*death, a flash of light, a wall of fire* という無生物主語が、通常、意志を持った生命体の主語と連語する *destroy* と共起し、擬人化されている。しかし、実際、*a flash of light* と *a wall of fire* という表現は、人間が科学の力を悪用して作り出した原爆が炸裂した瞬間を、想像力によって人間の五官を通して捉え、その原爆を象徴的に表したものである。擬人化された無生物の主体を焦点の当たる主語の位置に置くことで、本スピーチの核心に関わる、この人類の自滅手段とどう向き合うべきかという問題を聴衆や読み手へ正面から問う伏線となっていると思われる。この点は追ってセクション 2 で、さらに考察を加えたい。

この直後に、人が広島を訪れる理由を問う（下記、冒頭下線部）。この問いかけは、本スピーチ全体のいわゆる thesis statement（全体要旨）と concluding remarks（全体要旨を踏まえた結語）に相当すると思われる（9）節（モラルの意識革命）と（19）節（科学に係る叡智の本来的な活用の仕方）にも見られる。原爆のもつ壮絶な威力に思いを馳せ、死者を悼み、死者からの訴えを聞く。そして、人間の内面のあり方について正面から問う：

(2) Why do we come to this place, to Hiroshima? We come to ponder a terrible force unleashed in a not so distant past. We come to mourn the dead, including over 100,000 in Japanese men, women and children; thousands of Korean's; a dozen Americans held prisoner. Their souls speak to us. They ask us to look inward, to take stock of who we are and what we might become[2]. （下線部は、引用者による；以下、同様）

広島原爆の犠牲者は日本人のみならず、朝鮮人、アメリカ人も含まれていたことに言及したうえで、

[2] なお、この *who we are and what we might become* を目的語とする動詞句 *take stock of* という表現は、「棚卸をする」、から転じて、「評価、吟味する」という意味を持つが、類例として次のような文脈でも使われる：All told, life expectancy has increased by two years for women in Britain in the last decade, and by two and a half years for men. Again, there is more than we would like to do, and more that in time we will do. But for the moment it is right to **take stock of** how much has already been achieved — to the benefit of us all. (*The British National Corpus Online, World Edition* より；以下、BNC と略す）［下線部：これまでにどれだけ到達できたかを吟味すること］

（2）節の終りにある下線部の「内省」にある、*who we are and what we might become* という表現に注目しておこう。我々がどのような存在であって、どうなっていけるのか。本来的には互いを大切にし合うべき存在としての人間が、痛恨の極みというべき原爆の経験を通じて、どこへ向かって歩み直すべきかを、追って示す（18）節と連動する伏線としている。

次に（3）節において、広島における戦争の特異性について触れ始める。人類は常に無数の無垢な人間を犠牲にする戦争と共に歴史を刻んできたが、単にそのような戦争が広島を特別にしているわけではない、と指摘する。戦争は常に人類が生きるための手段を自らの滅ぼしのためにも用い、同じ人類の征服と開放を繰り返し、その都度、名も無き無数の無垢な者たちが犠牲となってきたと振り返る：

(3) It is not the fact of war that sets Hiroshima apart. Artifacts tell us that violent conflict appeared with the very first man. Our early ancestors, having learned to make blades from flint and spears from wood, used these tools not just for hunting, but against their own kind. On every continent, the history of civilization is filled with war, whether driven by scarcity of grain or hunger for gold; compelled by nationalist fervor or religious zeal. Emperors have risen and fallen. Peoples have been subjugated and liberated. And at each juncture, innocents have suffered, a countless toll, their names forgotten by time.

この冒頭では、*it is…that* の強調構文により、戦争経験に照らす広島の特異性を説き起こす。2 文目は遺蹟、遺物（*artifacts*）を主語とする無生物主語である。3 文目以降の構造について触れると、*ancestors* と *used* をそれぞれ主語、動詞とする主文の間に、カンマ（,）によって挿入された分詞構文（*having ～wood*）、ならびに *not* と *but* による相関語句がある。最終文では、文末に *a countless toll* と *their names* を意味上の主語とする、*forget* の過去分詞 *forgotten* による分詞構文がみられる。そこでは並列を示す *and* の代わりにカンマが用いられている。

この節を受けて次の 4 節では、広島に係る戦争の特異性という観点から、被爆地、広島・長崎が関わる第二次世界大戦は、力ある複数の大国が引き起こし、文明を築き上げる高尚な精神とは裏腹な、人類の欲望・支配欲により、わずか数年（実質 6 年間）で 6 千万人もの犠牲があったと訴える：

(4) The World War that reached its brutal end in Hiroshima and Nagasaki was fought among the wealthiest and most powerful of nations. The civilizations had given the world great cities and magnificent art. Their thinkers had advanced ideas of justice and harmony and truth. And yet, the war grew out of the same base instinct for domination or conquest that had caused conflicts among the simplest tribes; an old pattern amplified by new capabilities and without new constraints. In the span of a few years, some 60 million people would die — men, women, children no different than us, shot, beaten, marched, bombed, jailed, starved, gassed to death.

表現上、2 点留意しておこう。一文目の過去時制（*reached* と *was fought*）を基準に、2 文目、3 文目

で過去完了時制を用い、そこで過去の時点に差を設けている（*had given* と *had advanced*）。同様に、4 文目にも過去の時間差が表現されている（*grew* と *had caused*）。最終文の *would die* には、短期間で膨大な人命が犠牲になったことへの感情（苛立ち）が示されているとみられる[3]。

（4）節で指摘された人類の歩みの「光と影」を受けて、次節（5）では、広島、長崎の原爆によるキノコ雲が、人類の抱える矛盾を示すとする。自然にも抗いうる文化・文明の偉大な力が、人類自らをも破壊する力と表裏一体を成すと述べる：

(5) There are many sites around the world that chronicle this war — memorials that tell stories of courage and heroism; graves and empty camps that echo of unspeakable depravity. Yet in the image of a mushroom cloud that rose into these **skies**, we are most starkly reminded of humanity's core contradiction; how the very spark that marks us as a species — our thoughts, our imagination, our language, our tool-making, our ability to set ourselves apart from nature and bend it to our will — those very things also give us the capacity for unmatched destruction. （太字は、引用者による；以下、同様）

ここで、2 文目にあるように *sky* は、複数形 *skies* として現れることが珍しくない[4]。

広島原爆にも人類の抱える創造と破壊の矛盾をみた前節（5）を受けて、さらに、宗教も民族も国家も、人類の叡智が内包する矛盾、諸刃の剣を直視せず、それらに盲目であるため、大義名分のもと暴力を正当化してしまうと指摘する。愛、平和、正義を求めつつ、他方、殺人を許し、自己犠牲や協調を唱える一方で、自らと異なる人々に対し、抑圧的、非人道的振る舞いを行う：

（6） How often does material advancement or social innovation blind us to this truth.[5] How easily we learn to justify violence in the name of some higher cause. Every great religion promises a pathway to <u>love and peace and righteousness</u>, **and yet** no religion has been spared from believers who have claimed their faith as a license to kill. Nations arise, telling a story that binds people together in sacrifice and cooperation, allowing for remarkable feats, **but** those same stories have so often been used to oppress and dehumanize

---

[3] こうした助動詞 *would* の用法について、たとえば『Genius 大英和辞典』（大修館 2000）は「*would* に強勢を置き、感嘆的にまた付加疑問に用いることが多い」とし、次例を挙げた : Oh, it *would* rain just when we want to play outdoors.［何てことだ、雨だなんて、外で遊びたいのに］

[4] 類例を BNC より挙げておく。I <u>looked up to the **skies**</u> for no reason I can now remember, probably a spot of rain or a ray of sunshine.［下線部：空を見上げると、…］/ The British have fallen in love with this Mediterranean island because it has everything for a perfect holiday : <u>sunny **skies**</u>, glorious beaches, bustling resorts, friendly people, fascinating sights and beautiful countryside.［下線部 : 晴れた空］/（Diesel engines also produce nitrous oxides (NOx) , which <u>return from the **skies**</u> as acid rain.［下線部：空から（地上へ）戻ってくる］*skies* は詩的文脈のほか、この 3 例のように、いわゆる天気、天候を言うときにも見られる。

[5] この文は、内容面から直後の一文と並置されているが、文構造上はこの文が疑問文、直後の一文は *how easily* に導かれる名詞節と見られる。本稿は当該スピーチの公表テキストのうち、The Japan Times 版を基底としているが、The New York Times 版では *How often* ～の文末に疑問符をつけている。

those who are different.

ここでは下線部の A and B and C の表現が、通常の A, B, and C と比べていかなる効果を持ち得るかに留意しておこう。また、太字で示した逆接の接続詞 *and yet* と *but* にも注意しておく。

「諸刃の剣」の指摘は次節でも同様で、人類の叡智が生み出す「科学」もまた然り。一方で喜びと平和をもたらし（たとえば病気の治療、宇宙秩序の理解）、他方で、科学の進展に比例して、より効率的に人の命を奪う殺人兵器とする、と訴える：

〈7〉 Science allows us to communicate across the seas and fly above the clouds, to cure disease and understand the cosmos. But those same discoveries can be turned into ever-more efficient killing machines.

（7）節を踏まえ、以下（8）、（9）のふた節が、このスピーチ全体のいわば thesis statement とも考えられる。（8）節では、近代の戦争、広島の原爆は、人類の叡智の結晶とも言える科学が、人類の命を奪う道具ともなる真実を教えてくれる；(またその教訓として、) 核分裂を可能とした科学革命はモラルの意識革命も必要とすることだとする：

(8) The wars of the modern age teach this truth. Hiroshima teaches this truth. Technological progress without an equivalent progress in human institutions can doom us. The scientific revolution that led to the splitting of an atom requires a moral revolution, as well.

この（8）節の内容を噛み締めるために広島へ来るのだ、原爆の経験をした広島の現場に立つ、想像する、感覚を研ぎ澄ます、傾聴する、思い起こす、と次節（9）で説く：

(9) <u>That is why we come to this place.</u> We stand here, in the middle of this city, and force ourselves to imagine
the moment the bomb fell. We force ourselves to feel the dread of children confused by what they see. We listen to a silent cry. We remember all the innocents killed across the arc of that terrible war, and the wars that came before, and the wars that would follow.

（9）の冒頭 *That is why we come to this place* は、本スピーチ第 2 節での *Why do we come to this place, Hiroshima?* に呼応するものである。さらには追って（19）節でも再確認することになるが、ここでは特に現在時制の表現効果を噛みしめたい。広島の地に立って、想像力と感覚を研ぎ澄ませ、声なき声に耳を傾け、壮絶な死を遂げた無垢な人たちのこと、（同時に）過去に起きたさまざまな戦争、これから起きるであろう、さまざまな戦争に心を寄せる。現在時制が、今ここで思いを馳せる対象と自己との「直接性」とも符合するように感じられる。現在形が示す現在が、過去と未来を引き寄せ、現在の

力で過去と未来を融合させ、軌道修正を行い、あるべき方向へ歩み直すために必要な新たな時間の創造の場となっている。実質的な直接性を示す点で、現在時制がこの文脈に最も適切な時制と思われる。この（9）節で、行動を変化させる意志の力をばねとして、行動により意志を示す方向へ舵をきったといえよう。

原爆の追体験を想像する促しを（9）節から受けて、次節（10）では、そのような壮絶な死の苦しみを単なる言葉で表すことは出来ないが、歴史の核心部を直視して、（言葉でなく）別の方法で何ができるかを問い、その苦しみを減じていく責任を我々は共有する；被爆者の声は道義に係る想像力を高めてくれる、と訴えかける：

(10) Mere words cannot give voice to such suffering, but we have a shared responsibility to look directly into **the eye of history** and ask what we must do differently to curb such suffering again. Someday the voices of the hibakusha will no longer be with us to bear witness. But the memory of the morning of August 6th, 1945 must never fade. It fuels moral imagination. It allows us to change.

ここで、*the eye of history* という表現に注目しておこう。ここでの *eye* は「中心、眼目」の意であるが、対象に係る本質的部分と解釈してよいと思われる[6]。

次に（11）節で、広島の原爆後を振り返り、希望をもたらす選択がいくつかあったと述懐する。すなわち日米同盟、EU 設立、民族解放のうねりや抑圧された国家の自由主義化があった国際共同体は戦争回避と核兵器削減・廃棄を切望するに至ったと指摘する：

(11) And since that fatal day, we have made choices that give us hope. The United States and Japan forged not only reliance, but a friendship that has won far more for our people than we could claim through war. The nations of Europe built a Union that replaced battlefields with bonds of commerce and democracy. Oppressed peoples and nations won liberation. An international community established institutions and treaties that worked to avoid war and aspire to restrict and roll back, and ultimately eliminate the existence of nuclear weapons.

次節（12）では、しかしそれでもなお（*still*）、国家間の蛮行は絶えず、我々の責任を果たす行為は成し得ない。悪を為す人類の性は消せないかもしれない；だから（*so*）、諸国ならびに、日米同盟は、自衛手段を持たねばならない；だが（*but*）、米国をはじめとする核保有国の中にあって、我々は恐れ

[6] *The eye of history* を例えば次の 2 用例（1）、（2）と比べてみる。(1) Did she feel any guilt or shame each time she looked into the eye of a prospective student? (BNC) [下線部：将来有望な学生の眼] (2) I've looked into the eye of the island and what I saw was beautiful.（BNC）[下線部：島の中央部分]　ここで(1)は、(学生という)人間の眼であるが、(2)は島という無生物を対象に「眼」を用い、空間的な、より大きなものの内部、ほぼ真ん中にある領域という認識を反映する用法に転用しているとみられる。具象性の面から(2)は、人間の眼と同様に島も物理的に存在するものであるが、*the eye of history* という表現の場合、*history* を擬人化し、歴史に対峙する表現者の能動的な強さが感じられる。

の論理から抜け出す勇気をもち、核爆弾無き世界を追求しなければならない、と訴える：

(12) **Still**, every act of aggression between nations: every act of terror and corruption and cruelty and oppression that we see around the world shows our work is never done. We may not be able to eliminate man's capacity to do evil, **so** nations — and the alliances that we've formed — must possess the means to defend ourselves. **But** among those nations like my own that hold nuclear stockpiles, we must have the courage to escape the logic of fear, and pursue a world without them.

（12）節には、その前の（11）節の内容を受ける形で、冒頭から逆接（*still*）、続いて順接（*so*）、逆接（*but*）といった展開がある（太字部分）。話者が不安や精神的葛藤を抱えつつ、核兵器廃絶へ向けて現状打開を図る困難さがひしひしと伝わる。

そのような流れを受けて次節（13）も、自らが存命中の実現は無理であっても、「粘り強い努力」により核廃絶の道筋を描き続け、核拡散を防止できると訴える：

(13) We may not realize this goal in my lifetime. **But** persistent effort <u>can</u> roll back the possibility of catastrophe. <u>We can</u> chart a course that leads to the destruction of these stockpiles. <u>We can</u> stop the spread to new nations, and secure deadly materials from fanatics.

（13）の冒頭文を受けた *But* の後、*persistent effort can roll back* ～を「跳躍台」にして、*We can chart a course* ～、*We can stop the spread* ～という具合に、*We can* の反復リズムが生まれている。

このような粘り強い努力を訴えても、次節（14）にて、それだけでは不十分だと指摘する（下線部）。ライフルや爆弾による暴力が蔓延しているなか、「戦争そのものへの気構え」を変えねばならない（太字部分）；外交を通じて紛争を予防し、始まったら必死で阻止に努める；国家間の高まる相互依存関係を平和協調の大義名分とする；国家を破壊力でなく建設力で規定していく、と提言する：

(14) <u>And yet that is not enough.</u> For we see around the world today how even the crudest rifles and barrel bombs can serve up violence on a terrible scale. We must change **our mindset about war itself —** to prevent conflict through diplomacy, and strive to end conflicts after they've begun; to see our growing interdependence as a cause for peaceful cooperation and not violent competition; to define our nations not by our capacity to destroy, but by what we build.

加えて、次節（15）において我々人類自身の認識についての確認を行い、戦争そのものへの気構えと併せて、戦争から遠ざかる道を示唆する。すなわち、私たちは同じひとつの人類の構成員として互いに結ばれているということを再度思い起こさねば成らない；このことも我々が他の動物とは異なる証だからだ；過去の過ちを繰り返す遺伝情報には縛られない；教訓をつかみ、選んでいける；子孫ら

に過去とは異なるストーリーを語れる ― それは、共通の人間性を描くストーリー、戦争と残忍な振る舞いをなくしていくストーリーだと説く：

(15) And perhaps above all, we must reimagine our connection to one another as members of one human race. For this, too, is what makes our species unique. We're not bound by genetic code to repeat the mistakes of the past. We can learn. We can choose. We can tell our children **a different story —** one that describes a common humanity**;** one that makes war less likely and cruelty less easily accepted[7].

この節（15）の 4，5，6 文目では、*We can learn. We can choose. We can tell our children* ～という具合に、前節（13）と同様に、*we can* の反復リズムに乗せることで、語りに高揚感が生まれていると思われる。

また子どもらへ語り継ぐべき、共通の人間性を描くストーリーが必要だとされるが、この *story* は、後の（16）、（17）、（18）節にも見られ、スピーチ全体のキーワードの一つとして語られていく。

次節（16）では、（15）で描かれたような共通の人間性と戦争を遠ざけるストーリーを被爆者の内にみる。たとえば、原爆を投下したパイロットを許す女性被爆者 ― それは、憎悪の真なるものは戦争そのものだと認識したからだ。また、ここ広島で命を絶たれたアメリカ人の家族を捜し出した男性被爆者 ― それはその家族の喪失感が自他同等と思うからだとする：

(16) We see these **stories** in the hibakusha **—** the woman who forgave a pilot who flew the plane that dropped the atomic bomb**,** because she recognized that what she really hated was war itself**;** the man who sought out families of Americans killed here**,** because he believed their loss was equal to his own.

ここでは、ダッシュ、カンマ、セミコロンが相互有機的に活用されている。二人の被爆者を具体にあらわす区切りはセミコロン。原爆投下者を赦す女性と他者の喪失感を自他同等とみなす男性について、それぞれの理由を「カンマ（,）＋*because*」で導き、並置している。

次節（17）では（15）節で描かれたような共通の人間性と戦争を遠ざけるストーリーをアメリカ建国に係る独立宣言の内にみる。

わが国<アメリカ>のストーリーは次の簡明な言葉から始まった。すべての人間は等しく創造され、創造主から他者へ譲渡しえない権利（生命、自由、幸福の追求）を与えられている；しかしその理想を実現することは、決して容易ではない、国内でさえ、わが国民の間でさえも、と説く：

[7] 私見となるが、このような国家を超えた人類レベルのものの見方、考え方からすると、近年にわかに人類に直面している地球温暖化、エネルギー問題、人権問題といった "global issues" は、人類の構成員間の鎹（かすがい）であるともいえるのではなかろうか。

(17) My own nation's **story** began with simple words: All men are created equal, and endowed by our Creator with certain unalienable rights, including life, liberty and pursuit of happiness. Realizing that ideal has never been easy, even within our own borders, even among our own citizens.

この節の冒頭で、単純に「アメリカのストーリー」（たとえば、*America's story*）とは言わずに、「私自身の国のストーリー」 "*My own nation's story*" と説き起こした点に注目しておく。後者の表現には話者とアメリカ国との関係が明示されている。聞き流し、読み流してしまえばそれまでの、短かな表現ではあるが、そこには語る者、被指示対象となるアメリカ国、そして語る対象(すなわち聴衆)という三者関係が生まれ、語る者とアメリカ国との関係を明示しつつ、(アメリカ国の国民であり、かつその指導者として) 誇りと自信も含ませ、聴衆に対して真摯かつ迫真的な態度で語る姿勢が表れているように思われる。

このようなアメリカ建国時のストーリーについて、次節（18）では次のように展開する（逐語的にみる）。

「しかし、そのストーリーに誠実に向き合うことは努力に値する。それは努力すべき理想、大陸や海洋を横断して拡がる理想だ。あらゆる人が有する減らすことのできない価値、あらゆる命が、かけがえのないものであるという主張、我々はひとつの人類であり、家族であるということ、そしてその重要な構成員であるという根本的で、なくてはならぬ考え — このようなものこそが我々の語らねばならぬストーリーだ」:

(18) But staying true to that **story** is worth the effort. It is an ideal to be strived for; an ideal that extends across continents, and across oceans. The irreducible worth of every person, the insistence that every life is precious; the radical and necessary notion that we are **part** of a single human family— that is the **story** that we all must tell.

ここではアメリカ建国の精神を表す *story* の実現に向けて、これに誠実に取り組む努力の価値を強調する。この *story* を説明するために文脈上の類義語 *ideal, worth, insistence, notion* が有効に働いている。また最終文内にある *we are part* の *part* が無冠詞であることにも注意しておく。これには、単なる一部分ではなく、「重要な部分」という含みがある。

なお、追って本稿のセクション 3 にて触れるが、この（18）節の内容は、2017 年度ノーベル文学賞受賞に係るスピーチで、多様なストーリーを語り継ぐことによることばの力に言及した Ishiguro（2017）の主張とも符号するように思われ、興味深い。

以下、（19）から（21）節までが本スピーチの結論部となる。

次節（19）では再び、本スピーチ前半部、(2）節と（9）節での発問 に係る「広島を訪れる理由」へ戻る。（19）節は逐語的にみておく。「こうしたわけで我々は広島を訪れる。我々が愛する者たちを思

い起こすために ― 朝一番の子供らの笑顔;キッチンテーブル上で交わすつれあいとの優しい触れあい ; 親からの慰めの抱擁 ― こうしたことを思い巡らし、これらと同じ、かけがえのない瞬間、瞬間が 71 年前に、ここ広島でも展開されていたことを知るのだ。亡くなった人たち ― 彼らは、私たち同然なのだ。普通の人々はこれを理解すると思う。彼らは、これ以上、戦争を欲しない。むしろ科学の叡智が生命を育み、人を危めることのないよう望んでいる」:

(19) That is why we come to Hiroshima. So that we might think of people we love ― the first smile from our children in the morning; the gentle touch from a spouse over the kitchen table; the comforting embrace of a parent ― we can think of those things and know that those same precious moments took place here seventy-one years ago. Those who died ― they are like us. Ordinary people understand this, I think. They don't want more war. They would rather that the wonders of science be focused on improving life, and not eliminating it.

ここでは､広島という土地で起こった固有の出来事の経験を通じて､普遍的な教訓が語られている。

これを承けて次節（20）で、国家が下す選択、指導者が下す選択が、この簡明な知恵を反映させれば、広島の教訓は活かされるとする：

(20) When the choices made by nations, when the choices made by leaders reflect this simple wisdom, then the lesson of Hiroshima is done.

この（20）節一文の構造について考察してみる。*When*＋名詞句 (*the choices made by nations*), *when*＋名詞句 (*the choices made by leaders*) の後に、これら二つの名詞句に対応する述部 *reflect this simple wisdom* が現れ、主文 (*then*) *the lesson of Hiroshima is done* が続く。*when*＋名詞句が二つ並ぶ部分は、いずれも名詞句の部分が *when* 節の主部に相当し、共通する述部は *reflect this simple wisdom* である。これについて、一つ目の *when*＋名詞句の述部が省略されていると見てもよかろうが、他方、*when*＋名詞句が二つ並ぶ部分を「同格的」な関係とみてもよいかもしれない[8]。それは、文脈の意味から判断して、国が行う選択は、実質的に当該国の指導者（leader）が行う選択だからである。また、「同格的」とするのは、同格という概念を用いる場合、この文の *when*＋名詞句の構成単位が、文全体の構成からみて主格、目的格等の特定の「格」なる機能を有するとは認識しにくいからである。

（20）節で為政者の決断を促した後、最終節（21）では、次のように締めくくられる。「世界はここ

[8] 同格の意味を斟酌せずに、構造面からのみ考えれば、いわゆる共通構文［(Ａ＋Ｂ)Ｘ＝ＡＸ＋Ｂ］という見方も可能である。江川（1991:495）によれば、「共通構文は、文を簡潔にするためのもので、省略構文と共通点がある。この構文における共通関係は、a）主語と動詞、b）動詞と目的語、c）動詞と補語、d）助動詞と動詞、e）前置詞と目的語、f）修飾語句と被修飾語などの間に生じる」とある（各例文省略）。共通構文として捉えるならば、本スピーチ当該箇所の共通関係は「接続詞と主部」で、主部の主語は後置分詞修飾を受けているということになる。

広島で永遠に変わった。しかし今日、この街の子どもらはその全盛期を平和に過ごす。なんと貴重なことか。それはすべての子どもらを守り、すべての子どもらへ広げていく価値のあるもの。それこそ我々が選択できる未来だ ― 広島、長崎が原爆による戦禍の始まりでなく、モラルに係る意識の覚醒の始まりとして知られる未来だ」:

(21) The world was forever changed here. But today, the children of this city will go through their day in peace. What a precious thing that is. It is worth protecting, and then extending to every child. That is the future we can choose ― a future in which Hiroshima and Nagasaki are known not as the dawn of atomic warfare, but as the start of our own moral awakening.

一文目 *The world was forever changed here* は、本スピーチ冒頭（1）節の "*…death fell from the sky and the world was changed*." に呼応する。*moral awakening* は、（8）節の "a moral revolution" や（10）節に見られた "moral imagination" に呼応する。（1）節で同時に指摘された、広島原爆により人類が自滅しうる核兵器を保有したことについて、人類がこの悲惨な経験を契機に、科学に革命を起こしたのと同様に、人類のモラル面でも革命、覚醒を起こし、生命を育む方向のストーリーを子孫へ語り継ぐこと、核兵器をはじめ、戦争そのものや暴力の連鎖を断ち切っていく道を選び取ることを訴えた。

２．広島スピーチ（Obama 2016）にみられる文体的特徴：中核メッセージの引き立て効果

スピーチの流れと骨子がおよそ掴めたところで、本テキストの文体的特徴を通して、このスピーチを考察してみよう。スピーチの核心を効果的に伝えることとの関連で、以下、たとえば擬人法的表現（無生物主語構文）、時制表現、譲歩・逆説表現という観点からみてみよう。

２－１　擬人法的表現（無生物主語構文）：テーマの象徴化と聴衆への内発的思考の促し

擬人法とは、本来、人でないものを人と見立て、それを何らかの行為を行う者とみなし、主語に立て、文を構成し表現するものである。本来、人でないものを人と見立てるため、無生物主語構文とも言われる。たとえば、Obama（2016）の（1）節を再度示す。

Seventy-one years ago, on a bright, cloudless morning, **death** fell from the sky and the world was changed. **A flash of light and a wall of fire** destroyed a city and demonstrated that mankind possessed the means to destroy itself.　（1 節）［下線部：死が空から下り、; 閃光と火の壁が街を殲滅した］

擬人法の表現効果は当該の文脈ごとに考察する必要があるが、節（1）の場合、簡潔でパンチの利いた力強さがあるとともに、原爆投下の物理的事象に聞き手、読み手の注意を向けさせ、事象を操った人間や組織を直接言及しない効果も秘めている。また見方を変えれば、背景の因果関係には直接言及しないこの表現方法は、聞き手、読み手自身に対して、背景にある因果関係やその周辺の成り行きに

対する内発的な思考や考察、気づきを象徴的に促す効果があるともいえるかもしれない。

スピーチの中には他に、次のような擬人法的な表現があった（再掲）[9]。これらを節（1）の *a flash of light* と *a wall of fire* と対照させて考察してみよう：

・**Artifacts** tell us that violent conflict appeared with the very first man.　（3 節）
［下線部：（過去の人々の）遺構をみれば、暴力的な争いがまさに初期の人間から現れていたことが分かる］

・**The civilizations** had given the world great cities and magnificent art.　（4 節）
［下線部：文明の歴史を振り返れば、世界に偉大な都市と崇高な芸術がもたらされていた。］

・**Science** allows us to communicate across the seas and fly above the clouds, to cure disease and understand the cosmos.　（7 節）
［下線部：科学のおかげで、我々は海や空を越えて連絡が取れたり、病気の治療ができたり、宇宙が理解できる。］

・**Mere words** cannot give voice to such suffering, but we have (…). But the memory of the morning of August 6th, 1945 must never fade. **It** fuels moral imagination. **It** allows us to change.　（10 節）
［下線部：そうした苦しみは単なる言葉では表し得ない；その記憶によって、モラルに係る想像力が喚起され；その記憶によって、我々は変われる］

・But **persistent effort** can roll back the possibility of catastrophe.　（13 節）
［下線部：粘り強い努力によって大惨事の起こる可能性を（くい止め）元に戻しうる。］

・And yet that is not enough. For we see around the world today how **even the crudest rifles and barrel bombs** can serve up violence on a terrible scale.（14 節）

---

[9] 擬人法的表現に係る英語表現上の類例として、例えば BNC より 2 例を記す : Hudson (1967 , 1970) , in his work on subject choices made by schoolboys , found personality and IQ differences between arts specialists and science specialists . After giving pupils a variety of tests, he was able to divide the pupils into two basic types: convergers and divergers. (…) Hudson suggests that the reason the more conformist pupils tend to choose science is that **science** allows the convergent schoolboy to specialise in work which enables him to be unambiguously right or wrong. [下線部：科学の学習により、画一性の高い男子生徒たちは、自らに善悪をはっきりつけさせる仕事に専心できるようになる］/Basic research is an essential foundation for applied research and for the exploitation of technology in a society that seeks to be industrially competitive in a rapidly changing world. **Mere words** could do little in the short term to reverse the chaotic situation.［下線部：単なる言葉では短期間にその混沌とした状況を改める手立ては殆どない］／A cool head and hard and **persistent effort** will win the day.［下線部：冷静な判断と勤勉で粘り強い努力によってその（栄光の）日を勝ち取れるであろう。］

［下線部：なんと、ありきたりのライフル銃や樽爆弾でさえ、かなりの規模の暴力を人に与えうるのかということ］

先に、無生物主語について、本来、人でないものを人と見立てて主語に据えると述べた。確かに、上の引用例中にある *artifacts, civilizations, science, mere words, persistent effort, rifles, barrel bombs* は、人が或る目標に向かって取り組む精神的な営み（すなわち、*effort*）の他、すべて人ではないが、明らかに人が文化的にそれらの創造や発明の業に関与した代物である。また、相対的にみて、*rifles* や *barrel bombs* のように具象性の高い無生物主語と、*science* や *effort* のように抽象性の高いものといった違いはある。同じ、人でないものでも、最初に取り挙げた（1）節の *a flash of light* や *a wall of fire* は、それ自体は人間による直接的な文化的創造物、発明物とは言いにくいが、明らかに、科学の誤用で生み出された「原爆」を人間による瞬時の五官を通じて、具体的に、かつ、象徴的に表したものである。science と言わず、atomic bombs と言わずに、atomic bombs を象徴化して *a flash of light* と *a wall of fire* を用いた点で、他の無生物主語と異なる。人間の科学がもたらした原爆による光と火という表現の構図を考えると、象徴的な *a flash of light* と *a wall of fire* は、その背後に「科学」の擬人性と、科学の悪用によりもたらされた「原爆」の擬人性を併せもっている。本スピーチの主題となる無生物主語の中心語 *light* と *fire* が人の如く、*destroyed a city* という、本来であれば人間の行為者による主語に導かれる述部につながっている。これは、本来、平和をもたらすべき人間の科学が、「光」と「火」を通じて人類に対して非人道的な死をもたらしてしまった出来事を極めて象徴的に物語るスピーチの冒頭といえよう。スピーチ最終節（21）の moral awakening へ収斂させていく的確な導入ともいえる。聴衆者一人ひとりの深い内省を迫るにふさわしい、伏線的な冒頭ともいえると思われる。

２－２　時制表現：「現在」から描く未来へのストーリー

本スピーチの基本時制は現在時制である。現在時制は、Obama（2016）の 21 ある節の中で、2, 5, 7 から 10, 12 から 15, 18 から 20 の各節にみられ、計 18 例が認められる（全節の 85%）。現在完了は、過去を含む現在と考えられるため、現在として大きく括って捉えることもできよう。現在－現在完了の展開が二つある（3 節, 6 節）。過去時制のみは一つ（1 節）。しかし、節内の時制には、その他、幾つかの、複合パタンもある。各節を構成する時制が複数用いられている場合のつながり方をみると、たとえば：

現在－過去（16 節）
現在完了－過去（11 節）
過去－未来－現在（21 節）
過去－過去完了－現在（感情を示す *would*）（4 節）
過去－現在完了（17 節）

これらすべては、過去時制を含んでいるものの、過去の出来事を背景に、現在完了を含む「現在」を浮かび上がらせる構造になっていると思われる。現在と対照的な過去についてみてみると、いずれも、現在と無関係な、現在と切り離す過去ではなく、現在と対照的に特徴付けられる、重みある事実の出来事としての過去ということが分かる。たとえば、上記の 4, 11, 16, 17, 21 節の複合パタン内の過去が指示する対象をみておこう［過去時制のみから成る（1）節も含める］:

・過去（1 節）: 広島原爆投下に係る重みある事実の出来事としての過去
・過去—過去完了—現在［過去の出来事に対するスピーチ時の感情を示す *would*］（4 節）:
第二次大戦に係る事実の出来事としての過去
・現在完了—過去　（11 節）: 広島原爆後の社会情勢に係る重みある事実の出来事としての過去
（歴史的回顧）
・現在－過去（16 節）: 被爆者の方々の心の変化に係る重みある事実の出来事としての過去
・過去－現在完了　（17 節）: アメリカ建国史に係る重みある事実の出来事としての過去
・過去－未来－現在　（21 節）: 広島原爆投下による歴史的変化に係る重みある事実の出来事としての過去

上記（4）節のパタンについて補筆するならば、過去—過去完了の後に「感情を示す *would*」を用いた文があり、最後に戦死者を振り返った際の、その莫大な数に対する話し手の心的態度が現在として述べられていた。最初に第二次世界大戦に係る重みある事実の出来事としての過去（歴史的回顧）を述べ、これに続く過去完了は、過去に起こった二つの出来事の時間差を表し、「深い」過去と「浅い」過去に示し分けるためのものであった（いわゆる過去を示す過去時制に対して、「大過去」を示す過去完了）。

このように過去時制に照り返される形で現在時制や、現在として捉えうる現在完了時制が躍動している。それは、現在から意志をもって描くストーリーやヴィジョンが未来を創造する羅針盤ともなる、本スピーチにおける「モラル革命」の主張とも、おのずと連動するものと思われる。

２－３　譲歩・逆接表現：時制と連動させた「跳躍板」の活用

本スピーチには、譲歩・逆接の論理展開が数箇所みられ、*but* と *and yet* によりそれぞれ複数回（文頭、文中）、*yet* と *still* により一度ずつ（文頭）見られる。譲歩・逆接の「強さ」は容易には峻別しにくい。他方、展開方法の特徴としては、「通時」面での譲歩・逆接と「共時」面での譲歩・逆接があり、前者は、「過去から現在（もしくはもう一つ別の過去）への道筋（点検・確認）」を描く際に、後者は、現在の取り得る選択肢からの「賢明な選び取りの道筋（掴むべき展望、人類のストーリー）」を描く際に、譲歩・逆接の論理を自らの主張や説得に「弾み」をつけることに活かし、いわばスピーチ展開上

の「跳躍板」としているように思われる[10]。再掲しつつ、当該の論点を確認しながら、簡単に考察してみよう：

・（4）節：The World War that reached its brutal end in Hiroshima and Nagasaki was fought among the wealthiest and most powerful of nations. The civilizations had given the world great cities and magnificent art. Their thinkers had advanced ideas of justice and harmony and truth. **And yet**, the war grew out of the same base instinct for domination or conquest that had caused conflicts among the simplest tribes; an old pattern amplified by new capabilities and without new constraints. (…)
＜［*and yet* 前後の時制：過去・過去完了　対　過去］：**点検・確認**＞

ここでは、世界大戦を起こした国々の富と力が、一方で都市の建設や壮麗な芸術の創作を生み、正義、調和、真理の思想を発展させ、他方で戦争を引き起こしてきた；その共通の根は、旧態依然たる尽きぬ支配・征服の本能であると指摘される。*And yet* の前後において、同一の本能から善と悪が生み出される矛盾をついている。この内容のもとに時間軸の面からみれば、動詞の時制がいずれも過去、過去分詞であることとも連動し、この論点は通時的な面から捉えた過去の吟味（点検・確認）と考えられる。

・（5）節：There are many sites around the world that chronicle this war — memorials that tell stories of courage and heroism; graves and empty camps that echo of unspeakable depravity. **Yet** in the image of a mushroom cloud that rose into these skies, we are most starkly reminded of humanity's core contradiction; how the very spark that marks us as a species — our thoughts, our imagination, our language, our tool-making, our ability to set ourselves apart from nature and bend it to our will — those very things also give us the capacity for unmatched destruction.
＜［*Yet* 前後の時制：現在　対　過去から現在］：**点検・確認**＞

ここでも、一般戦争と広島原爆との対比の中で、後者が示す人類の抱える矛盾を指摘する。文化・文明の力が自滅する力と重なり合う。時間軸からみれば通時と共時の両相に照らしながらの汎時的な展開といえるかもしれない。

・（6）節：(…) Every great religion promises a pathway to love and peace and righteousness, **and yet** no religion has been spared from believers who have claimed their faith as a license to kill. Nations arise, telling a story that binds people together in sacrifice and cooperation, allowing for remarkable feats, **but** those same stories have so often been used to oppress and dehumanize those who are different.

[10] 通時、共時という表現は、ここでは、時制上の時間の変化が関与するか、しないか、の意味で用いている。

＜［前半（*and yet* 前後の時制）：汎時　対　過去から現在；　後半（*but* 前後の時制）：汎時　対　過去から現在)］：前半、後半ともに**点検・確認**＞

前半は宗教の抱える矛盾。すなわち、愛、平安、正義のストーリーの一方で、信仰を守る殺人の黙認。後半は、国家の抱える矛盾。すなわち、国家台頭の際、犠牲や協調による国民の結束を語る一方で、同じ語りから、自分たちと異なる者たちへの圧政や非人道的ふるまいが起きてきた、と述べ、前者後者いずれも汎時的な相での指摘のあと、過去から現在にいたる内容点検が示されている。

・（7）節：Science allows us to communicate across the seas and fly above the clouds, to cure disease and understand the cosmos. **But** those same discoveries can be turned into ever-more efficient killing machines.
＜［*But* 前後の時制：現在　対　現在の可能性］：**点検・確認**＞

科学の矛盾。すわなち、一方で、通信技術革命、病気治療、宇宙の解明、他方で、同じ平和利用の原理からの殺人兵器への応用。

・（11）－（14）節：(11 節) And since that fatal day, we have made choices that give us hope. The United States and Japan <u>forged</u> not only reliance, but a friendship that <u>has won</u> far more for our people than we could claim through war. The nations of Europe <u>built</u> a Union that replaced battlefields with bonds of commerce and democracy. Oppressed peoples and nations <u>won</u> liberation. An international community <u>established</u> institutions and treaties that worked to avoid war and aspire to restrict and roll back, and ultimately eliminate the existence of nuclear weapons.（12 節）**Still**, every act of aggression between nations: every act of terror and corruption and cruelty and oppression that we <u>see</u> around the world <u>shows</u> our work is never done. We may not be able to eliminate man's capacity to do evil, so nations — and the alliances that we've formed — <u>must possess</u> the means to defend ourselves. **But** among those nations like my own that hold nuclear stockpiles, we <u>must have</u> the courage to escape the logic of fear, and pursue a world without them.（13 節）We <u>may not realize</u> this goal in my lifetime. **But** persistent effort <u>can roll back</u> the possibility of catastrophe. We <u>can chart</u> a course that leads to the destruction of these stockpiles. We <u>can stop</u> the spread to new nations, and secure deadly materials from fanatics.（14 節）**And yet** that <u>is</u> not enough. For we see around the world today how even the crudest rifles and barrel bombs can serve up violence on a terrible scale.（…）

＜［その１(*Still* 前後の時制）：過去　対　現在；　その２(*But* 前後の時制)：現在から未来への決意　対　現在から未来への決意—＞moral awakening；その３(*But* 前後の時制：現在から未来への見通し　対　現在から未来への見通し—＞時間的視野の転換・拡大；　その４(*And yet* 前後の時制：現在から未来への見通し　対　現在　—＞脅威対象に係る視野の転換･拡大と本質把握への転換)］
（その１：**点検・確認**、その２：**掴むべき展望**、その３：**掴むべき展望**、その４：**点検・確認**）＞

原爆経験後の国際協調等、世界情勢における希望の兆候「にもかかわらず」、暴力の蛮行はやまない。悪を行使する力を無くせないであろうからには、自衛のための手段（核兵器の保持）はやむを得ない。「しかし」、恐れの論理を抜け出す勇気をもって、核爆弾のない世界の実現へ踏み出さねばならぬ。その実現は存命中には無理かもしれない。「しかし」、粘り強く努力することで核拡散防止、核廃絶への道筋が描ける。「しかし」、それだけで十分でなく、一般兵器を含めた暴力の廃絶を目指す必要があるとした。（11）－（14）節のくだりは、譲歩・逆接による転調が４つあり、うねりがもっとも激しい。Obama 氏自身が当時、国際社会を導く指導者の一人として、現実と展望の間隙にあって、その内なる苦悩と葛藤を生々しく滲ませつつ、核のみならず非人道的暴力一般の廃絶をも訴えた。

このように、スピーチ展開上、譲歩・逆接の前後関係を時制、時間相の面から観察すると、「通時面での譲歩・逆接」と「共時面での譲歩・逆接」があり、一つは、「過去から現在（もしくはもう一つ別の過去）への道筋（点検・確認）」を描く際に、もう一つは、「現在の取り得る選択肢からの賢明な選び取りの道筋（掴むべき展望、人類のストーリー）」を描く際に、それぞれ典型的に用いられ、譲歩・逆接の論理が自らの主張や説得に活かされ、いわばスピーチ展開上の跳躍板の役目を果たしているとみられる。このように、時制と連動させた譲歩・逆接表現による「跳躍板」を梃子にして、後続の 15 節以降 18 節までの人類全体の新しい希望のストーリーへと説得力をもって繋がれていく。

３．社会文化的文脈からの考察：不安定な転換期の重層的なうねり

本論最後に、Obama 氏による広島スピーチ（2016）を社会文化的文脈で捉えるための一助として、その骨子において少なからず関連性を有すると思われる 3 つのスピーチを見ておきたい：

（1）　Obama 氏のノーベル平和賞受賞スピーチ（2009）

（2）　非政府組織 International Campaign to Abolish Nuclear Weapons（ICAN）によるノーベル平和賞受賞スピーチ（2017）

（3）　ならびに、Kazuo Ishiguro 氏によるノーベル文学賞受賞スピーチ（2017）

順次，以下に簡単に触れておく。

３－１　Barack Obama 氏によるノーベル平和賞スピーチ（2009）との関連：Evolution vs. Revolution

Obama 氏による広島スピーチ（2016）の 8 節にみられる *Moral revolution*（cf. 10 節の moral imagination, 最終節の moral awakening）に関連して、同 Obama 氏が 2009 年にノーベル平和賞を受賞したおりの別のスピーチに以下のようなくだりがある。そこでは、*revolution* の類義表現ではあるが、*revolution* とは異なる、“*evolution*” が用いられている。

Obama（2009）前段で、2009 年までのアメリカの地球保全に向けた軍事的役割とその実績を述べた後、平和維持に必要な戦争と戦争そのものの愚かさによる二律背反を説き、これに対する対処法に

触れる。すなわち、前米大統領 Kennedy の発言を引用し、人間の本来的性質に対して、急な革命ではなく、人間の institution に係る漸進的な進展に基づきながら、実際上、到達可能な平和に焦点を当てていくと述べる。そのくだりを引用する (Obama 2017: 155-156)：

> （…）So yes, the instrument of war do have a role to play in preserving the peace. And yet this truth must coexist with another — that not matter how justified, war promises human tragedy. The soldier's courage and sacrifice is fully of glory, expressing devotion to country, to cause, to comrades in arms. But war itself is never glorious, and we must never trumpet it as such.
>
> So part of our challenge is reconciling these two seemingly irreconcilable truths — that war is sometimes necessary, and war at some level is an expression of human folly. Concretely, we must direct our effort to the task President Kennedy called for long ago. "let us focus," he said, "on a more practical, more attainable peace, based not on a sudden revolution in human nature but on a gradual **evolution** in human institutions." A gradual evolution of human institutions. （…）

2016 年の広島スピーチにおける *moral revolution* に関しても、*a gradual evolution* の段階をはさみつつ改善を図るという議論も可能であったかもしれないが、2016 年にはその段階には言及せず、一気に真正面から、モラルに係る revolution を促したこととなる。それは scientific revolution（科学革命）と併置された捉え方であり、そこには同時に、一刻の猶予も成らぬという緊迫感が感じられる。

３－２　ICAN（2017）との関連：*Moral* と *Story*

非政府組織 ICAN は世界各国と国連を舞台として核兵器廃絶国際キャンペインを展開し、核兵器禁止条約の制定に尽力した。ICAN によるスピーチ（2017）は、当キャンペイン事務局長 Beatrice Fihn 氏ならびに広島で被爆し、現在、カナダ在住の反核運動家 Setsuko Thurlow 氏によってなされた。人類の未来を左右する我々一人ひとりの「モラル」と「ストーリー」の観点から、各スピーチの一節を引用しながら、Obama 広島スピーチ（2016）との関連をみておきたい。

ICAN（2017）における Fihn 氏の担当スピーチに係る最後の語りは次のようであった：

> We are campaigners from 468 organizations who are working to safeguard the future, and we are representative of **the moral majority**: the billions of people who choose life over death, who will see the end of nuclear weapons.

［概要：核廃絶キャンペインは世界 468 組織を束ね、善悪をわきまえる道義心（道徳観念、倫理観）を持った多数者の代表として人類が生き延びる未来の創造に尽力する。］

ここで言う *the moral majority* の *moral* は、Obama（2016）の中で見られた、人類の生命の選択に係る一連のキーワード *moral revolution, moral imagination, moral awakening* に見られる *moral* と同等とみてよいであろう。Majority の理解を深めつつ、思いを一つにし、同時に粘り強く、まだ協力を得られていない層への説得と協力を仰ぐ道筋を描こうとしている。

他方、広島原爆による被爆者の一人、Setsuko Thurlow 氏（ICAN 2017）は、次のように語った（冒頭 3 節目から 6 節まで）：

> I speak as a member of the family of hibakusya － those of us who, by some miraculous chance, survived the atomic bombings of Hiroshima and Nagasaki. For more than seven decades, we have worked for the total abolition of nuclear weapons.
>
> We have stood in solidarity with those harmed by the production and testing of these horrific weapons around the world. People from places with long-forgotten names, like Moruroa, Ekker, Semipalatinsk, Maralinga, Bikini. People whose lands and seas were irradiated, whose bodies were experimented upon, whose cultures were forever disrupted.
>
> We were not content to be victims. We refused to wait for an immediate fiery end or the slow poisoning of our world. We refused to sit idly in terror as the so-called great powers took us past nuclear dusk and brought us recklessly close to nuclear midnight. We rose up. We shared our **stories** of survival. We said: humanity and nuclear weapons cannot coexist.
>
> Today, I want you to **feel** in this hall the presence of all those who perished in Hiroshima and Nagasaki. I want you to **feel**, above and around us, a great cloud of a quarter million souls. Each person had a name. Each person was loved by someone. Let us ensure that their deaths were no in vain.

［概要：被爆者の一人として語る。核兵器廃絶に向けて 70 年を過ごしてきた；核兵器の製造に係る実験の被害を受けた者たちと連帯してきた；犠牲者であることに甘んじることはなかった。人類の命を繋いでいくストーリーを共有し、立ち上がった。人道主義と核兵器は共存できない；今日、被爆地、広島、長崎の犠牲者の魂に心を寄せてほしい。その死を決して無駄にしてほしくない。］

この引用の 3 節目にある *our stories of survival* は、人間本来の命を重んじる点で、Obama（2016）の一連の *story* にまさに通じるものといえる［cf. Obama（2016）の（15）から（18）節］。

また、上記引用の 4 節目にみられる *I want you to feel* ～に係る聴衆者への感覚に訴えるくだりも、Obama（2016）の “moral imagination” の促しに通じるものである。呼応する部分を再掲する［Obama（2016）：（9）から（10）節］。

> （9）That is why we come to this place. **We stand here**, in the middle of this city, and **force ourselves to**

imagine the moment the bomb fell. We **force ourselves to feel the dread of children** confused by what they see. We listen to a silent cry. **We remember all the innocents** killed across the arc of that terrible war, and the wars that came before, and the wars that would follow.

（10）Mere words cannot give voice to such suffering, but we have a shared responsibility to look directly into the eye of history and ask what we must do differently to curb such suffering again. Someday the voices of the hibakusha will no longer be with us to bear witness. But **the memory** of the morning of August 6th, 1945 must never fade. It fuels **moral imagination**. It allows us to change.

３－３ Ishiguro（2017）との関連：「ことば」による多様な新しい世界の創造

2017 年度ノーベル文学賞受賞者、Kazuo Ishiguro 氏には、長崎で被爆した母親があり、生後数年を長崎で過ごした経験を持ち、核問題への関心も深い作家のひとりである。本稿では直接的にこの作家と核問題との関連性には触れず、Ishiguro（2017）における文学の重要性のアピールに注目し、そこから言葉の力への期待と行動をくみとり、若干の考察を加えておきたい。

Ishiguro（2017）から、そのスピーチを締め括る最後の二つのパラグラフを引用する：

But let me finish by making an appeal － if you like, my Nobel appeal! It's hard to put the whole world to rights, but let us at least think about how we can prepare our own small corner of it, this corner of 'literature', where we read, write, publish, recommend, denounce and give awards to books. If we are to play an important role in this uncertain future, if we are to get the best from the writers of today and tomorrow, I believe we must become more diverse. I mean this in two particular senses.

Firstly, we must widen our common literary world to include many more voices from beyond our comfort zones of the elite first world cultures. We must search more energetically to discover the gems from what remain today unknown literary cultures, whether the writers live in far away countries or within our own communities. Second: we must take great care not to see too narrowly or conservatively our definitions of what constitutes good literature. The next generation will come with all sorts of new, sometimes bewildering ways to tell important and wonderful stories. We must keep our minds open to them, especially regarding genre and form, so that we can nurture and celebrate the best of them. In a time of dangerously increasing division, we must listen. Good writing and good reading will break down barriers. We may even find a new idea, a great humane vision, around which to rally.

［概要：（第一パラグラフ）全世界を整えることは難しいが、文学を通じての言語活動によって、世界の一隅を整えることはできる。これからの言語活動には多様性を受け入れることが必要で、そこには、二つの意味がある。（第二パラグラフ）ひとつは、言語活動を豊かにするために、未知の文学活動者を、場所を問わずに精力的に見出すこと。もう一つは文学の可能性を狭めぬように細心の注意を払い、次世代の言語活動者からの創造的な語りに耳を傾けること。分断が加速する時代にあって、人道にかな

った新たな考えや展望を見出したい。]

さまざまな感性のもと、言葉を通じて、創造的かつ多様な言語活動を展開していく力，ストーリーの力を肯定し、分断から結束への道筋のヒントとも受け取れる。多様な文化圏からの声を互いに聞き合う。その過程で誤解を小さくし、お互いをよりよく理解しあう中で、互いに命を育みあうストーリーを描き、よりよい世界の構築につなげていけると読める。言葉の創造的な力への期待と行動が謳われていると思われる。Obama 氏の説く人類の平和構築に向けてのストーリーもその延長線上に位置づけられよう。

おわりに

本稿は、Obama（2016）を主要な題材として、書き言葉面でのスピーチの核心とそれを効果的に伝えるための文体上の仕掛けはいかなるものかを考え、そのスピーチの社会文化的な位置づけについて若干の覚え書きを記した。本稿が、外国語教授法への応用や文体論的な考察に資する方向で、解釈や議論をさらに深めていければ幸いである。

References

石川慎一郎（2017）『ベーシック応用言語学―L2 の習得・処理・学習・評価』東京：ひつじ書房.
江川泰一郎（1991）『英文法解説 改訂 3 版』東京：金子書房.

Texts

Fihn, Beatrice and Setsuko Thurlow. (2017) “International Campaign to Abolish Nuclear Weapons (ICAN)–Nobel Lecture, Oslo, Norway, December 10, 2017.” Retrieved from https://www.nobelprize.org/nobel prizes/peace/laureates/2017/ican-lecture_en.html

Ishiguro, Kazuo. (2017) “Kazuo Ishiguro – Nobel Lecture, Oslo, Norway, December 7, 2017.” Retrieved from https://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/laureates/2017/ishiguro-lecture.html

Obama, Barack. (2016) Full text of Obama’s speech in Hiroshima. (The Japan Times) Retrieved from https://www.japantimes.co.jp/news/2016/05/27/national/full-text-of-obamas-speech-in-hiroshima#.Wk8hkkxuJ9A（Online: May 27, 2016; Last modified : June 3, 2016)

_____ (2016) Text of President Obama’s Speech in Hiroshima. (The New York Times) Retrieved from https://www.nytimes.com/2016/05/28/world/asia/text-of-president-obamas-speech-in-hiroshima- japan.html

_____ (2017) “A Just and Lasting Peace,” Nobel Peace Prize Lecture, Oslo, Norway, December 10, 2009, ed. by E. J. Dionne Jr. and Joy-Ann Reid, *We are the Change We Seek: The Speeches of Barack Obama*, pp. 150-165, Bloomsbury, New York.

Corpus

The British National Corpus Online, World Edition. 小学館コーパスネットワーク.